

4. 現職教育

1. 研究主題

「よりよい自分と社会を創造する子供の育成」
～社会を見つめ、考え、共に学び合う社会科学習～
～いきいきと活動し、気づきを生む生活科学習～

2. 主題設定の理由

子供が瞳を輝かせて、本気で学習に取り組んでいる。見たり聞いたり調べたりしたことから自分の考えを太らせていく。仲間と共に、お互いの意見を認め合いながらも、「さてよ、そうではないぞ」と考えを言い合っている。私たちはこのような学習をめざしている。一人ひとりの子供が元気よく登校し、精一杯学校生活を送り、「明日はこんなことをしたい」と充実感いっぱい一日を終えることを願っている。

21世紀は、新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域で重要性を増す「知識基盤社会」となった。また、グローバル化は私たちの社会に多様性をもたらし、急速な情報化や技術革新は、生活を変化させつつある。このような社会では、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら主体的に学び続け、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、生活を創り上げることができる子を育てることが大切だと考え、本研究主題を設定した。

本校においては素直で従順な子供が多く、さまざまな状況を柔軟に受け止めることができるが、ものごとへのこだわりや課題意識が乏しく、集団の中で自己主張をしたり、他者の考え方に疑問をもって追究しようとしたりすることに弱さが見られる。そこで、学校教育目標である『主体的・創造的な子供の育成』を図り、平成24年度より社会科・生活科を中心に研究を進めてきた。

社会科や生活科は、子供の主体的な活動を中心に据えることのできる学習である。生活科・社会科の学習を通して子供が社会とかかわり合い「もっと、こんな自分になりたい」「より人々が幸せにくらいしていける社会にしたい」と願いをもつ。そうすることで、一人ひとりが自分の暮らしを見つめ、学校生活や家庭においても課題意識をもち、自分の可能性を発揮しながらその課題を克服し、たくましく、よりよく生きようとする子に育つと考えている。

社会科では、知識や思考力などを基盤として、社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力、現代の諸問題を歴史的に考察する力、地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度など、国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育んでいくことが求められている。

そのためには、子供自身が主体となり社会の様々な『ひと・もの・こと』に積極的に向き合い、しっかり見つめることが大切である。同じものを見ても、子供によって見方・感じ方はさまざま、過去の生活経験とのずれが驚きや疑問を生み、そうした知的好奇心から、それを解決したいと個の追究が始まる。その子なりに考えた意味や価値には、子供の個性や生き方が表れるため、教師は「どうしてこう考えるのか」とさぐりながら、一人ひとりとかかわりたい。さらに、仲間と考えを交流し、整理分類するなど、共に学び合うことで、自己の考えがより深まり、新たな疑問を生む。このような学習を大切にしたいと考え、社会科のサブテーマを「社会を見つめ、考え、共に学び合う社会科学習」とした。

生活科では、具体的な活動や体験を通して学習を展開していく中で様々な気づきを得て、自立への基礎を養うことをねらいとしている。

身近な人々、社会や自然等にであうことで、一人ひとりが思いや願いを持ち、いきいきと活動し、子供たちが自分自身の生活について考え、生活上の習慣や技能を身につけ、さらに前向きに生活していこうとする基礎を養っていくことができる。また、体験活動と表現活動とが繰り返されることで、児童の個別的な気づきが関係的な気づきに、また自分自身への気づきにつながるようにしたい。このような子供の姿を願って生活科のサブテーマを「いきいきと活動し、気づきを生む生活科学習」とした。

そのために、子供が感じ取ったことを、自分自身の実感の伴った言葉にして表したり、様々な事象と関連付けて捉えたりするように、教師のかかわりを考えていきたい。

では、「よりよい自分と社会を創造する子供」に近づくために、どのような資質や能力を育てるべきか、私たちは、次の2つを考えている。①「興味・関心、意志、愛着」②「解決力」である。

「興味・関心、意志、愛着」は、まずは身の回りの人、もの、ことなどを知ろうとすることから始まる。情報が溢れている現代、子供たちは一つ一つのものの意味や理由をじっくり考える間もなく生活している。それゆえ、何もしないで身の回りの人や社会に関心を持つことはないと考え。しかし、「よりよい自分や社会」をめざそうとするには、身の回りの課題に気づくことが必要である。興味・関心を持って見つめることで、今まで「見えども見えず」だった人の働きや、ものごとのしくみ、起こっていた出来事などに気づき、驚きや違和感、疑問を持ち、主体的な関わりが始まる。そして、繰り返しかかわることで、その対象に対して「もっとこうなればいいのに」や「自分たちが何とかしよう」というような強い意志や愛着心が育ってくる。そうすることで社会の中の出来事が子供の「自分ごと」になる。

また、「解決力」は、過去のアイデアなり解決法を、目の前の問題と結びつけて自分なりにアレンジすることと言える。例えば「別の事例や過去の事例と比べる」「過去の経験や資料と関連づける」「立場を変えて視る」「幾つかのことがらと分類・整理する」（今後、これらの思考の働かせ方の手掛かりとなるものを「ものさし」と呼ぶ）など過去の体験・経験を手掛かりに自分の解決法（考え）を創り出す。そんな学習活動を通して、「見えども見えなかった」身の回りの社会事象の「意味」に気づくと考え。

これらの資質・能力を育てるために、社会科では、「社会的事象（ひと、もの、こと）に働きかけ、自分の経験を基に社会的な思考を働かせ、自分なりに何か意味を見出す」ような問題解決学習を展開したい。「何か」とは、そのものの特徴や、役割、工夫、働き、変化（移り変わり）などが考えられる。「社会的な思考を働かせる」とは、自分の「ものさし」を使って社会的な事象を、時間の経過や、位置や空間的な広がり、相互の関係に着目して考えることである。

また、生活科では、「自分と社会的事象（ひと、もの、こと）との関わりで、とらえたり、予測・試すなどしてつくり出したりする」そのために、体験・経験と表現活動が繰り返され、気づきの質を高めていけるような学習を展開したい。

次の社会事象と出合った時に「ものさし」が問題を解決する手がかりとなる。このような学習を繰り返すことで、たくさんの「ものさし」を手に入れ、子供の社会に対する見方や考え方が広がり・深まり、自分だけでなく社会の幸せを願い、よりよく生きようとする人に育っていくと考えている。

研 究 主 題
「よりよい自分と社会を創造する子供の育成」
～社会を見つめ・考え・共に学び合う社会科学習～
～生き生きと活動し、気づきを生む生活科学習～

児童の実態

- 体験や見学に興味を持ち、言われたことや出された課題について、素直に取り組み、考えることができる。
- 社会事象について、友達の考えを認め、体験したことを思い出しながら自分の考えと比べることができる。
- 自ら主体的に社会事象に興味・関心を持ち、知りたい解決したいと調べたり、働きかけたりする力が弱い。
- 自分の過去の経験を基に、見学や体験で見聞したことや資料などの情報を、比べたり関連させたりして考えを創ることができる子が少ない。

生活科・社会科でめざす子供の姿

- 社会事象(人・もの・こと)に進んでかわり、見つめようする。
- 課題をもち、それを解決しようとその子の持つ個性や過去の経験をもとに、よく考え、表現する。
- 学習対象となるもの・出会う人々や教師・友達との対話により、今まで見えていなかったことに気づいたり、自分の考えを固めたり、捉えなおしをしたりする。
- 見方や考え方を太らせ、変わってきた自分に気づき、より愛着を持ち、するどく社会を見つめていく。

そのためにつきたい資質・能力

身の回りの人・もの・こと・活動に対する

興味・関心・意志・愛着

情報や経験を目の前の問題と結びつけて考える

解決力

学びに向かう力・人間性

学習指導要領との対応

思考力・判断力・表現力

知識・技能

努力点

☆子供をさぐる

教材の選定・単元展開の工夫・一人学習への支援
 全体学習での支援（対話的な学び）

☆「ものさし」を持って課題に向かわせる

時間的・空間的・関連的に・・・

○比べる○分類する○関連づける○視点をかえる

めざす学習 ☆社会科の問題解決学習

社会事象（人・もの・こと）
 に働きかけ

経験をもとに社会的な思考を働かせ
 ・時間的に・空間的に・関連的に
「ものさし」を用いて考える

自分なりに
「何か」意味を見出す
 ↓
 特徴・役割・工夫・働き・
 変化（移り変わり）など

☆生活科の学習

生活 ⇄ 体験・経験
 表現（思い・気づき） ⇄ 体験・経験
 表現（思い・気づき） ⇄ 体験・経験
 表現（思い・気づき） ⇄ 生活

3. 指導にあたっての努力点

研究主題に迫るためにも、子供や地域に根ざした学習でありたい。それは、各指導者が子供と共に日々の生活や身近な地域の中から問題を見出し、探究的に学びを創り上げていく学習である。そのため、次の点について努力していきたい。

（１）子供を探る（個をとらえ・個を生かす）子供を知らずして授業のしようがない

子供は一人一人個性があり、家庭状況、生い立ち、生活様式などにより、同じものを見ても捉

え方が違う。そのため、教科の学習の中だけでなく、遊びや仕事、友達との関わり、家庭での生活などあらゆる生活の中で個を知ることにも努め、学習の中でかいたもの・絵・日記・カルテ・授業分析などから絶えず子供のとらえ直しをしていく必要がある。

そして、教材や学習問題に対して個がどのようにかわるかを考え、その単元を通してこんな姿が見られるであろうと願いを持ちたい。

☆着目児について

各単元に着目児を置く。

単元を通して、その子の学びの筋道を追っていく。

本時では、その子がどんな発言をするか、友達とどうかわるか、どんな変容が見られるかなどを予想し、実際の授業で検証する。

(2) 教材について

教材の選定にあたっては、教材そのものの価値だけでなく、子供が教材に出合ったときどのようなとらえようとするか等、子供を見つめる延長線上で社会の問題を見つめていきたい。言い換えれば、教師のねらいだけでなく、子供の思いの中にも追究する価値を見出し、子供の思いと教師のねらい（意図）をすり合わせながら学びを創り上げていくようにしたい。

(3) 単元計画の工夫

子供は、強い驚きや疑問を持つと、それをエネルギーとして意欲的な追究につなげていく。このような強い問いを生むために、体験活動・自己表現の機会・適切な資料の提示等、追究の意欲を高めるための学習活動の工夫を大切に単元を計画する。

(4) 授業の工夫

○「ものさし」を持たせる (別表)

社会科ものさし	時間的に
	空間的に 「比べる」「分類する」「関連づける」「視点をかえる」
	関連的に
生活科ものさし	「比べる」「関係づける」「予測する」「試す」「見立てる」

「ものさし」は子供たちが学習課題を解決しようとする際の思考の働きかけ方である。教師はひとり学習や話し合いの場で「ものさし」を提示し、子供たち自身が課題を解決するため、どのものさしを使って考えるかを意識させる。それを繰り返すことで「この問題を解決するためには、こうして考えるとよい」という思考の働きかけ方を体得する。

○かく活動

子供たちが自分の考えを太らせるために、まずはかく活動を大切にしたい。かくことによって、自分の考えを整理し、より深め、はっきりと自覚し自信を持つことができる。そのため体験や見学の後はもちろん、授業の途中で考えを整理するために書かせる、授業後や単元後に学習を振り返る、などの機会を多くもちたい。

○対話的な学び

友達の考えを認めながらも、自分の考えを話すなど、子供同士の対話的な学びの中でも、「自分の考えと比べる・関連づける・視点をかえる」などの思考が働き、個々の考えが深まる。そのために、個の考えを大切にするような学習の構えを持たせ、自分と異なる友達の考えを知ることや、討論することを愉しませたい。

4. 本年度の取り組み

○本年度は、全員1授業の研究授業を実施し、研究教科である社会科・生活科の教科特性等に

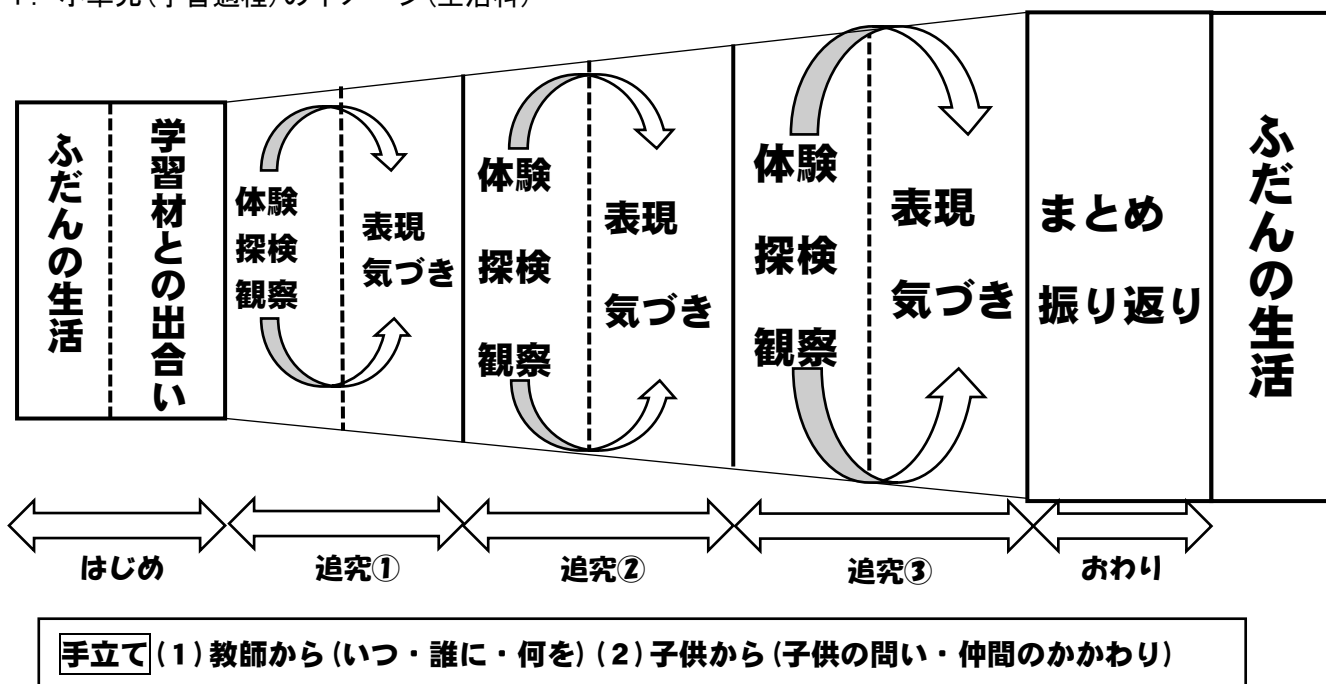
ついてとらえられるようにする。

- 学習問題について、一人学習等をもとに自己の考えをしっかりと持ち、互いに考えを出し合いながら高め合う学習を追究する。(みがきあい)
- 研究先進校視察、共同研究や講師招聘などによる研修を積極的に行う
- 「開かれた学校」「開かれた学級」「地域と共に育つ学校・児童」となるよう地域人材の活用やゲストティーチャーによるより効果的な指導法の改善を目指し、広く教育的支援を求める。
- 教育環境の一層の整備と充実に努める。

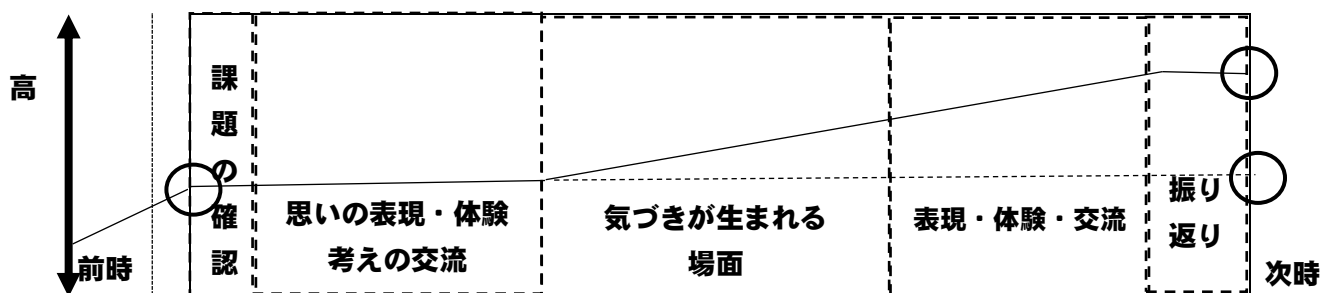
5. 本年度の研究について

- 「1時間の学習イメージ」で示す通り、意図的・計画的に“学びを高める手立て（しかけ）”を考え授業設定を行う。そのために「単元イメージ」で示す中のどの過程で、何をねらいとするかをはっきりさせる。
- 協議会では、子供の「関心・意欲、意志、愛着」が高まった場面や「解決力」が発揮された場面など、子供の動きや子供の発言を具体的に出し合い、教師の手立てが効果的であったか、などを検討していく。

1. 小単元(学習過程)のイメージ(生活科)

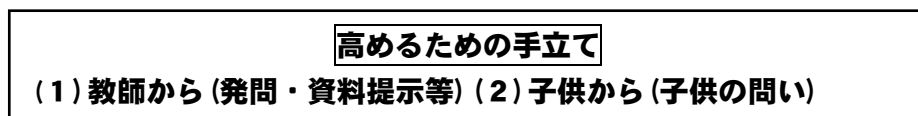
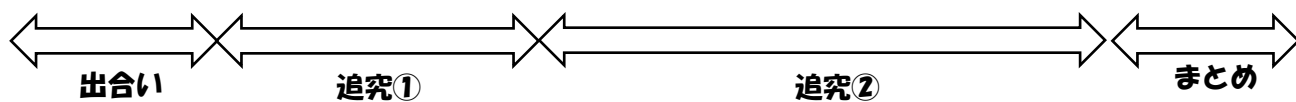
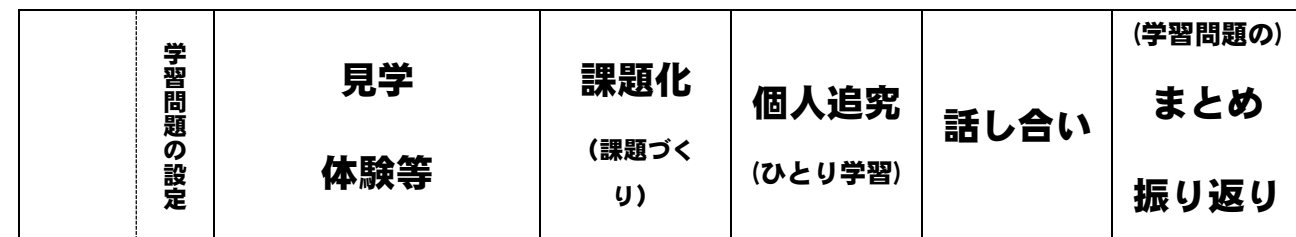


2. 考えの深まりが見られる1時間の学習のイメージ



※線は子供の学びの質の高まり

1. 小単元(学習過程)のイメージ(社会科)



2. 考えの深まりが見られる1時間の学習のイメージ

